医療従事者の方への感謝の気持ちを行動に
～自分の趣味を活かして社会貢献～

3年4組26番　野崎 美優

1、はじめに・研究動機

コロナウイルスが流行している中、私にできることは感染症予防をすることだけだった。これは今の時期で言うと私たちが社会のためにできる最大のことだろう。そして、とても大事なことだと思う。だが、私はいつも私たちが健康に暮らせるように支えてくださっている医療従事者の方へ何かできないかと思った。だが、高校生は医療従事者の方達に大きなものを返すことはできない。それらを踏まえて、いつも私たちの健康の手助けをしてくださっている医療従事者の方たちに私たち学生ができることはないのかと考えた。これが私の研究動機だ。

2、序論

まず、医療従事者不足を解決するということに注目した。でも、医療従事者不足を解決するために学生にできることは少ない。そこで、医療従事者不足を解決するという視点を変え少しでも医療に貢献するために身近に私たちにできる事を探してみることした。そこで私は、私自身が入院した病院について思い出してみることにした。そこでは小児科でクリスマス会・クリスマスコンサートというイベントが行われており、病院の医者や看護師の中で歌や楽器が得意な人を集めて入院している小児科の子供たちに向けて音楽コンサートをしていた。私はそのコンサートで元気をもらったことを思い出し、音楽と医療を結びつけて学生にもできることを考えようと思った。先行研究として私は「市大メディカルコンサート」というものを見つけた。「市大メディカルコンサート」とは新型コロナウイルス感染症の患者の手当てに追われる医療従事者を応援しようと、大阪市立大学医学部1年の有志8人がクラシックのチャリティーコンサートを3月15日に開催する。企画したのはバイオリン担当の鍵野佑登さん（19）で、高校時代に医療体験プログラムに参加。プログラムを経験して他の大学に進学した医学生たちもサポートしている。会場の外に置く募金箱の収益とクラウドファンディングによる支援金は医療物資の購入に充てて大阪府看護協会に寄贈する。無料チケットは全席予約済みだが、コンサートや医療従事者への応援メッセージなどをツイッターで募っている。「医療従事者がコロナ治療に身をすり減らしているのに、医学生の自分は医療に携わることができずに歯がゆかった」こう話す鍵野さんは、一時は音楽大学への進学も考えていた。3歳からバイオリンを始め、2017年に若手音楽家の登竜門「KOBE国際音楽コンクール」優秀賞を受賞。同年、東日本大震災の流木などで作った「TSUNAMI VIOLIN」を弾く演奏会にも

招待された。医大進学へと舵を切ったのは高校2年だった18年夏。大阪大学心臓血管外科のプログラムに参加し、「命を救う仕事がしたい」と医師を目指すことを決めた。大阪市立大学医学部に合格したが、新型コロナウイルス感染拡大で20年4月の入学式は中止、講義もなくなった。「だったら実家の兼業農家を手伝おうと、田起こしと草刈りに明け暮れました。5月にオンライン講義が始まったものの、家族以外の人と会わない生活に変わりない。それが辛かった」今できることは何かを考え、たどりついたのがチャリティーコンサートだった。コンクール受賞歴や大舞台の経験がある医学部1年の7人に声をかけた。コンサート会場は大阪市阿倍野区の区民センター小ホール。国のコロナ感染防止策の指針に従い、観客は収容定員の50％の150人とし、3月8日時点で緊急事態が解除されていなければ無観客開催とする。クラウドファンディングの返礼として、感謝のメールと手紙を送るほか、後日、動画投稿サイト「ユーチューブ」でコンサート動画を限定配信する。「今の社会はコロナで張りつめている。自粛生活で疲れた気持ちが和らぐ、心に火を灯すようなコンサートを届けたい」と鍵野さん。その一方、感染防止策などの不安は尽きず、「全てが初めての挑戦。ツイッターでメッセージをもらえれば励みになるし、紹介もしたい。医療従事者への応援にもつながると思う」と話している。プログラムOBも側面支援を始めた。金沢大学、兵庫医科大学、島根大学に進学した医学生たちがコンサートの録音録画や演出、告知で協力しており、8人は講義と試験の合間を縫って練習を重ねているところだ。と彼らを取材した読売新聞みんなの教育ネットワーク医療体験プログラム「コロナ・チャリティーコンサート　医療体験プログラムOBが企画」のサイトに掲載されていた。
私はこの団体の人たちはまだ収入も安定していない学生にも関わらずこのようなチャリティー活動をしているという点に注目した。私はこのような方法で私たち学生もチャリティー活動として何かできるのではないかと考えた。そこで私はこの団体の人たちは自身の趣味である音楽を通してチャリティー活動をしていると思った。趣味は楽器演奏や絵を描くこと、読書、写真を撮ること、裁縫など沢山ある。私はそのそれぞれが持つ趣味を医療への貢献に繋げられるのではないかと考えた。楽器演奏が趣味ならユーチューブや音楽・音声配信サイト、絵やイラストを書く事ならイラストや絵専用の販売アプリ、サイトがあったり、読書はオーディオブックと言って本を朗読して投稿するサイトなどがある。また、クラウドファンディングといったプロジェクトを立ち上げた人や法人に対し、不特定多数の人が、購入・寄付・金融といった形態で資金を供与する仕組みのアプリがある。このような方法を使って少しずつお金を集めてそれを寄付や募金することでバイトなどをすることが難しい私たちでも医療に貢献できると考えた。この方法は自分自身も趣味を楽しみながら社会貢献できるというメリットがあると私は考えた。

３．本論

私はこの方法がどれくらい難しいのか調べるために自分自身で実践しようと考えたが、時間がなかった。そのため、4年ほど前からネットで自身で描いた絵を売って、募金などをしている知り合いに話を聞いてみることにした。「購入されたものは30分程度で描いた簡単な絵や何日もかけて描いた絵など幅広い。自分は趣味として描いているから、それが誰かの癒しとかになってるなら嬉しいし、描くこと自体楽しい。大変なことはない。仕事じゃないからいつ休憩してもいいし、余裕を持って楽しくできる。たまにこの絵を描いて欲しいといったリクエストももらったりしている。」と知り合いは言っていた。このことから趣味ということもあって楽しみながら社会貢献ができるということがわかる。時間に追われることもないため、焦るということも少ないということがわかる。彼はSNSでよく起こる誹謗中傷については「誹謗中傷のコメントが送られる時もあるが、そのような時はコメント機能をオフにするなどをして、対策している」と話していた。

４．結論

医療に学生が貢献することは難しいと考えてしまいがちだと思うが、実際にはそうではないことがわかった。私たちは自分の趣味や好きなことを生かして医療へ貢献できる。そうすることで自分の好きなことをしながら、社会貢献をすることに繋がる。しかし、懸念点として誹謗中傷のリスクがある。多くの趣味は音楽や絵などの芸術であり、それは人の感性が関係している。そのため、価値観の違いなどでトラブルが起こることもあるだろう。

５．おわりに

コロナ禍になる前、私は風邪などの感染症の感染予防などをしっかりしてこなかった。そのせいで、家族などにうつしてしまう時があった。だが、コロナ禍に直面し、この探究をすることで自分の命は自分自身で守らないといけないということを実感した。自分の命を自分自身で守らなければ、自分の周りの人にも迷惑をかけてしまうということを感じた。

６．参考文献・出典

読売新聞みんなの教育ネットワーク医療体験プログラム「コロナ・チャリティーコンサート　医療体験プログラムOBが企画」アクセス日11月11日
https://kyoiku.yomiuri.co.jp/iryou/graduate/contents/ob.php

板谷 理恵 アスマークアンケート調査データ 「趣味に関するアンケート調査」アクセス日11月11日
https://www.asmarq.co.jp/data/ex2610/